

教育場面における夢の活用(Ⅲ)

——ユングの宗教夢解釈に対するフロムの批判——

細 部 国 明

夢をどう解釈するかは、夢見者にどう対応するかに影響する。(Ⅰ)では夢に願望を探すのではなく、補償できるものを考えた。(Ⅱ)では夢には信頼に足るものが含まれていることを示そうとして、ユングの宗教観について述べた。しかし、それに対しては幾つかの批判もあるので、今後はそれらを検討してみたい。

1. フロム, E. の宗教観

1) 魂の治癒としての精神分析

フロムも夢と宗教について述べており、ユングの扱った宗教夢の解釈に直接批判を加えている。しかし、フロムのユングに対する批判は単に夢に現われた宗教に対するものだけではなく、フロムの体系的な宗教観と結びついているので、まず、フロムの宗教観について考察してみようと思う。

フロムは「宗教とは、個人に構え (orientation) の枠と献身 (devotion) の対象とを与える一つの集団が共有している思考や行動の方式 (system) 一さいを意味する¹⁾」と定義している。その定義が実際にどのような内容を含むかについては「人は動物や樹木や、金や石の偶像や、見えざる神や、聖者や悪魔的な指導者たちを崇拝することもあるし、また、自分の祖先や国家や階級や仲間や富や出世を崇拝する人もいるだろう。宗教は破壊や愛や支配や友愛の発展につながっていくこともありうるし、また、理性の力を促進させたり麻痺させたりすることもできる。自分のそうした方式 (system) を世俗的なものとは思わないで宗教的なものだと思う人もいるかも知れない、また、逆に自分は宗教なぞ

持っていないと考えて、一般に世俗的とみなされている権力とか富とか出世のような目的への献身 (devotion) は、実用と手段のための何ものでもないと思っている人もあろう²⁾」と述べている。フロムの定義によれば上に示される方式はすべて実体において宗教である。過去、現在、未来を通じて宗教を持たない社会や時代は考えられない程宗教の意味を広く規定している。フロムはフロイトの精神分析が生物学的色彩が濃く、社会的な見方が薄いので、精神分析を社会学的立場から修正しようとする新フロイト派の一人であり、その宗教観も社会的色彩が濃いものとなっている。さらに、そのもととなる構えの粹や献身の対象を求める欲求、すなわち宗教的欲求は人間存在に本能的なものであり、人間に固有 (inherent in man) のものである³⁾、とみている。そして、その表われは社会学的に広範囲にわたるので、問題は一般的な宗教か無宗教か、一神教か多神教か、有神論か無神論かなどではなく、どのような種類の宗教かということ、すなわち、それが人間の発展を、いわば「人間特有の能力 (specifically human powers) を展開させ促進させるものであるか、またはそれらを閉塞させるものであるか、ということにある⁴⁾。次に、フロムの「人間特有の能力」とは、どのような能力を意味するのかをみていきたい。

フロムは種々の事例をあげて、精神分析を社会的適応 (social adjustment) を目標とする精神分析と「魂の治癒 (cure of the soul)」を目標とする精神分析の二種類に分類している⁵⁾。そして「魂の治癒」としての精神分析の中には、それにふさわしい諸能力が存在すると考える⁶⁾。真実を求める能力⁷⁾、自由と責任を感じる能力、隣人を愛する能力⁸⁾、良心の声に敏感な能力などがそれに相当する。フロムが人間特有の能力を展開させる宗教というとき、その人間特有の能力は、多分に「魂の治癒」としての精神分析に必要な諸能力と共通点を持っている。

2) 権威主義的宗教と人道主義的宗教

他方で、フロムは無神論的宗教と有神論的宗教、狭義の宗教と宗教的性格をおびた哲学体系などの差異にかかわらず適用できるものとして、人道主義的宗教 (humanistic religion) と権威主義的宗教 (authoritarian religion) の二つを

区別することが重要であるという⁹⁾。なぜなら、これらは異った宗教体験を派生させてくると考えられるからである¹⁰⁾。権威主義的宗教体験の根本要素は「人間を超越する力に対する屈服¹¹⁾」である。それは自分の外にある自分を越えた力によって支配される認知である。それに対し、人道主義的宗教は「思想と愛とによって把握されるような世界と自己との関係に基礎づけられた、一切物との一致の体験¹²⁾」を招来するという。フロムが真の宗教と呼びたいのは人道主義的宗教に他ならない。

そのような真の宗教はいかなる状況から発達してくるかに関して、フロムは「自己の運命に自由と責任を感じる人や、自由と独立を追求する少数の間では、人道主義的宗教が発達してくる¹³⁾」という。ここでフロムが述べている自由と責任、自由と独立などを求める能力は、「魂の治癒」に必要な諸能力の中の一部として非常に強調されているものであった。このことは、「魂の治癒」に必要な諸能力、少なくとも、その中の自由や責任を感じる能力を追求するかしないかにより、おのずから異った種類の宗教体験が派生してくる、ということの意味する。また、フロムは「宗教的ということ、人道主義的諸宗教の根本的な教えに共通に見られる能度という意味に解するならば、『適応的治療』はなんら宗教的機能を持ちえない¹⁴⁾」という。そして、魂の治癒としての精神分析は極めて明確に宗教的機能を持っているということを示そうとしている。

フロムの基本的な構想は二種類の宗教と二種類の精神分析の対応にある、ということを知るだけで、今は満足しなければならないと思われる。なぜなら、人間の諸能力の分類だけを考えてみても、また単に宗教の分類だけを考えてみても非常に複雑になる。その上、それらの間に完全な対応関係が証明されることを期待するのは、現在では無理があると考えられるからである。

ちなみに、例証¹⁵⁾であるが、フロムは人道主義的宗教の例証として、初期の仏教、道教、また、イザヤ、イエス、ソクラテス、スピノザの教説、ユダヤ教やキリスト教における神秘主義、フランス革命の理性宗教などをあげている。更に大きな流れとしては初代キリスト教が人道主義的であったが、二、三百年

後ローマ帝国を支配する者たちの宗教になった後ではキリスト教における権威主義的傾向が支配的になったこと、また、キリスト教という一つの教説の中にも人道的な原理と権威主義的な原理の二つが並存していることなどをあげ、人道主義的宗教と権威主義的宗教の区別は、様々の宗教を区別するばかりではなく、同一宗教のうちにもその区別はなされうるとしている。フロムの宗教観を以上のように概括してみたが、それが宗教夢の解釈にどうかかわるかを次に考察していきたい。

2. ユングの宗教夢解釈に対するフロムの批判

以下に取り上げる夢は、ある若い知性的な男性がほぼ10か月にわたって書きとった400以上の自分の夢の中から選んだものである。夢見者は幼い頃カトリックの教育を受けたが、これらの夢を見た当時は特に教会とは関係を持っていなかった。それらの夢に関してユングは詳細な考察をしているが¹⁶⁾、ここではユングの夢解釈に対してフロムが異議を唱えている宗教に関する〔夢19〕と〔夢16〕の2つの夢を中心に二人の解釈を比較考察していく。なお、〔夢19〕と〔夢16〕についてのユングの解釈をみていく過程で取り上げる〔夢20〕〔夢21〕〔夢22〕についてはフロムは言及していない。

1) 教会の夢

〔夢19*〕家が立ち並んでいるが、どの家の周りにも芝居に出てくるような道具立てが、つまり舞台装置や書割が見られる。「バーナード・ショウ」という名前が眼に入る。作品は遠い未来のことを題材にしたものだというのである。ある書割の上に英語とドイツ語でこう書かれている。

これは万民のカトリック教会である。

これは主の教会である。

自分を主の道具だと感じている者は誰でも入ることができる。

その下に、これよりも小さな文字で「この教会はイエスとパウロによって建立されしものなり」と印刷されている——恰もある会社がいかに古い創業であ

* 夢の番号は「教育場面における夢の活用」からの通し番号である。

るかを誇らかに宣伝しているといった感じである。私は私の友人に「来いよ、ひとつ中に入ってどんなものかとくく見てみようじゃないか」という。友人はそれに答えて「宗教的感情を持っているからといって、どうして大勢の人間が一堂に会さなくちゃならないのか、僕にはさっぱり判らない」という。そこで私は「そりゃあ君はプロテスタントだから、絶体に判りっこないだろうね」と応じる。ある婦人がこの私の言に心からの同意を示す。それから私は、教会の壁に檄文のごときものが貼られているのを見る。それは次のような内容である。

兵士諸君！

もし諸君が、主の御力の内にあると感じているならば、主に直接呼びかけるような真似はやめよ。言葉によって主に近づくことはできない。さらにわれわれは諸君に衷心より勧告する、主の属性について互いに議論をかわすようなことをしてはならない。それは無駄なことである。なんとなれば価値高くして重大なものは、言葉を以ってしては表現できないものだからである。

署名

法王……………

(名前は読めない)

それから私たちは中へ入る。内部は回教寺院に、特にハギア・ソフィア寺院に似ている。つまりベンチがなく、そのために素晴らしい空間の効果を発揮しているし、絵や彫像もなく、壁には装飾として格言を枠に入れたものがいくつか懸かっている（ハギア・ソフィア寺院に、あの『コーラン』から採られた格言が掲げられているのと同じである）。格言の一つはこういう文句である、「汝らに善行を施す者に諂うなかれ」。前に私の言に賛意を表した婦人がわっとばかりに泣き崩れ、「そんな！それじゃあ、もう何もかもおしまいだわ！」と叫ぶ。私はそれに答えて、「この文句はまったく正しいと思いますがねえ」という。しかし婦人はもういない。私は、前に一本の柱があって、その柱に視野をさえぎられるという恰好で立っているが、向きを変えてみると、大勢の人が私の前に集まっているのが眼に入る。私はその人々の仲間には入ってはず、一人で立

っている。しかし彼らの姿は非常にはっきりして顔まで見える。全員が声を揃えて「われら神の御力の内にあることを告白す。天国はわれらの内にあり」という。これは非常に厳粛な調子で、しかも三度繰返される。それからパイプ・オルガンの演奏が始まり、バッハの合唱を伴うフーガの一つが歌われる。しかし、本来の歌詞は歌われず、その上、部分的にはコロラチューラと思しき声部だけで歌われることもある。それから、「他のものはみな紙にすぎぬ」(わが心を動かすことはない、という意味らしい)という言葉が繰返される。合唱がやむと、この集まりのたのしき団居の段 (der gemütliche Teil) が始まるが、それはちょうど学生たちのパーティに見られるような雰囲気である。そこにいるのは朗らかで円満な人間たちばかりである。彼らは人垣の間をあちこち往き来して、互いに話しに興じたり挨拶をかわしたりする。それから葡萄酒と茶菓が配られ(葡萄酒はある聖公会神学校で作られたものである)、教会の繁栄を祝して乾杯し、教会員の増加に対する歓びを表現するためでもあるかのようになり、「今やカールもわれらの仲間に加わった」というリフレインのある流行歌が拡声器を通じて流される。一人の司祭が私に次のように説明する。「これは些か枝葉末節に属するたのしみですが、この余興は教会によって公式に承認され許されているものなのです。われわれは幾分かアメリカ的やり方というやつに合わせなければならぬのです。われわれのようにこういう大衆を相手にしなければならぬ場合には、これも已むを得ません。しかしアメリカの教会とわれわれが根本的に違う点は、われわれが反禁欲主義的行き方に徹しているということです」。ここで目が覚めるが、非常にほっとしたような気持になる¹⁷⁾。

(1) 婦人の悲しみと格言の意味

この夢の中でユングとフロムの解釈¹⁸⁾の最大の相違点は夢の中段にある婦人の悲しみをどのように位置づけるかという点に絞られてくる。

① 初めにこの箇所に対するユングの解釈を見てみようと思う。婦人がわっと泣き崩れた発端は、コーランから採られた「汝らに善行を施す者に諂うなかれ」という格言を見たことに始まっている。このあたかも最もな格言を見て婦人

はなぜ悲しんだのであろうか。これが解明されるためには、この夢はその前後の夢や無意識と関連がつかなければならぬ。なぜなら、無意識には意識から独立した面があり¹⁹⁾、無意識は無意識自体の存在とまたその連続性を有していると見るからである。ユングにとっては、この一個の夢は無意識の連続性を表わす夢の系列 (a series of dreams) の中の一つでしかない。すなわち夢の系列からこの箇所を意味づけようとするのである。この婦人の悲しみの発端となっているその格言は何を意味するのであろうか。ユングはその箇所の解釈に苦労したようである。次にその要点を示したいと思う。

結果的には夢見者の無意識の連続性を時間的流れに沿った五つの時点でもってつなぐことができる。第一の時点として夢見者のこれまでの状況をあげることができる。夢見者は極端な知性的態度を維持するために、自分の人格の本能的部分を全く無視してきた。その結果、待は時々本能的部分にうち負かされ、制しがたい爆発におそわれた²⁰⁾、という状況がある。

第二の時点は、原始林の中の夢をみた時である。

〔夢20〕原始林の中である。一匹の象が威嚇するような格好で輪に動いている。そのとき大きな類人猿 (ape-man) か熊かあるいは穴居人のようなものが棒をもって夢見者を襲ってくる。突然 "尖りあごひげの男" が現れてその襲ってくるものをにらみつけると、それは魔法にかかったようになっている。しかし、夢見者は不安でたまらない。「すべてのものは光によって治められなければならない」という声がきこえる²¹⁾。

この夢の少し前の夢の状況として、彼の無意識であるアニマ²²⁾が多くのニンフ (nymphs) へと分解したことが述べられている。そしてこの夢では、そのニンフたちがもっと原始的な構成要素に分解された状況として象や類人猿が表われていると解釈される。「最終的にその声は "すべてのものは光によって治められなければならない" と宣言する。恐らく、これは洞察力を有する意識的な心の光、正直に対応することによって獲得された本物の *illuminatio*²³⁾ を意味している²⁴⁾」声の意味するところは、象や類人猿で表わされるような無意識の暗

黒の深みを無知や詭弁でこれ以上否定してはならないということである、と解される。

第三の時点は猿の再興の夢をみた時である。

〔夢21〕人が大勢いる。人々はみな正方形になってぐるぐると左方向へ歩いていく。夢見者はその真中にあるのではなくて、端の方にいる。人々は猿(Gibbon)を再興しようとしているのだという²⁵⁾。

この夢に出て来た猿は、その前に見た〔夢20〕に出て来た類人猿(ape man)と連続しており、左方向²⁶⁾への道は明らかに人間存在の動物本能的な根底へと下っていく道であると解釈される。このような状況で、その猿(Gibbon)を再興するということは、類人猿一元型的事実としての人間—(the anthropoid—man as an archaic fact—)を再興するという意味にちがいないという²⁷⁾。猿を再興するということは、つまり彼が第一の時点で無視していた本能的な人格部分を意識秩序の体系の中へ再建するということを意味する。しかし、彼はこれまで無意識の最も都合の悪い面を見てきており、無意識の持っている様々な傾向に対して不安(afraid of)を感じていたのであるから、今後「意識的な態度が大きく変化」して、はじめてそのような回復が可能となる²⁸⁾。

第四の時点が〔夢19〕の教会の夢を見た時である。この夢の中の婦人が泣き崩れた意味を解明するには、この後の第五の時点の〔夢22〕の中に有力な手がかりが存在するので、こちらの方を先にみてみようと思う。それは正方形の空間で、動物たちを人間に変容させる儀式の夢である。

〔夢22〕正方形の場所の中で、動物を人間に変容させる目的で、複雑な儀式が行なわれている。逆方向へ這っている二匹の蛇はただちに除かれなければならない。狐や犬などの動物たちがいる。人々はその正方形に沿って歩いており、四隅でこれらの動物たちにふくら脛を噛ませなければならない。もし逃げれば、すべては水泡に帰すのである。こんどはもっと高貴な動物である牝牛や山羊がその場へやってくる。四匹の蛇が四隅へ這っていく。それから会衆は列を作って外へ出ていく。二人の献身的な聖職者が一匹の大きな爬虫類を携えて

入ってきて、その爬虫類を形が定かでない動物の塊ないし生命の塊に触れさせる。するとそこから神々しい姿形に変容した人間の頭が現われてきた。ある声が「これらは生存 (being) の試みである。」と宣言する²⁹⁾。

この「正方形の場所で動物を人間に変容させる夢」は明らかに先の「正方形の空間で再興される猿」〔夢21〕のテーマを継続すると考えられる。正方形の空間で「猿が再興 (reconstructed) せられたのは、この夢でそれを人間に変容させるのが目的 (purpose) だったのである²⁸⁾」。猿が更に分解したと考えられる動物たちを人間に変容させるということは、これまでの夢見者の意識体系の中にはその妥当な位置をしめていなかった本能的部分を意識に統合することであると解される。四匹の蛇はもはや逃げようとせず四隅に位置し、その変容ないし統合の過程が進んでいき、夢の中では動物の人間への変容の儀式が行なわれた。その変容が、少なくとも夢では予示 (anticipated) され、達成されたのである。潜在可能性 (potential achievement) としての人格の再生 (renewal of personality) が成功したことを意味する。しかし、その事実はいかなる客観的基準をもってしても確認できない主観的状态である³⁰⁾。その夢の変容の儀式の途中に「もし逃げれば、すべては水泡に帰すのである」という文句が出てくるが、もしここで逃げるとしたら、どのような逃げ方があったのであろうか。その逃げ方の少なくとも一つの試みが、この夢の前に見た「教会の夢」〔夢19〕に表われていると判断される。

ここで第四の時点で見つめた「教会の夢」〔夢19〕に戻るが、この夢は「正方形の空間で再興される猿の夢」と「正方形の空間で動物を人間に変容させる夢」の間に見た夢ということになる。この夢で婦人の「そんな！ それじゃあ、もう何もかもおしまいだわ！」と発した言葉は、動物を人間に変容させる儀式の途中に出てきた「もし逃げれば、すべては水泡に帰すのである」という文句と著しく符号している。〔夢21〕の猿（彼の人格の無意識的な本能的部分）を再興しなければならないことから生じる夢見者の不安は、今まで無視してきた非合理的な無意識の部分との連結を回復しはじめた彼の意識の立場からすればもっと

もなことであった。そこで、「これに続く教会の夢は、教会が与える宗教にすがってこの不安からのがれようとする試みを表わしている²⁸⁾」。「汝らに善行を施す者に諂うなかれ」という格言に対して「この文句はまったく正しいと思いますがねえ」と夢の中で彼が答えているのは、彼の意識が教会が与える宗教にすがろうとしたことを表わしていると推論できる。その状況に対して、彼の無意識の部分である婦人は「そんな！ それじゃ もう何もかもおしまいだわ！」と真に迫った抗議をして、その場から消え去り、夢の後半の推移にはもう注意を払おうとしなかったというのである³¹⁾。ここに出てくる婦人はユングの分析心理学では「アニマ²²⁾」と呼ばれているもので、夢見者の無意識を表わし、彼の劣等機能 (inferior function³²⁾) の代理である。

②婦人の悲しみと格言の箇所についてフロムの解釈³³⁾を検討する。婦人が悲しんだのはその格言に端を発している点ではユングと一致する。まず、格言の意味であるが、フロムは下記のように解釈する。夢見者は幼児期に権威型の宗教を与えられた。しかし、この夢が現われる時期には権威による支配から自由になろうとして反逆を試みる精神が優勢であった。そして、彼は強い父親像³⁴⁾を伴うような権威主義的宗教は、神に諂う教会の習慣である、と考えるようになっていた。夢の中の「汝らに善行を施す者に諂うなかれ」というコーランから採られた格言は、神に諂う教会の習慣に対する夢見者自身の批判 (ユングの場合は、夢見者が教会の宗教に保護を求めること) を表現したものである。そのような権威主義的原理を拒むなら彼は成長するであろうが、そのことは同時に母親にとってやがては彼を失うことにもなるだろうということを母親は感づいている。だから、母親が泣き叫ぶのである³⁵⁾。夢の中の婦人は Freudian³⁶⁾と同じように夢見者の母親を象徴していると解釈される。

(2)夢全体について

① はじめにユングの解釈を見る。夢の前半ではプロテスタントは影を薄めた形で、彼の幼児期の宗教であったカトリック教会が推奨されている。ここで「以前の信仰形式を再びよみがえらせるというのは、彼の意識的な努力や決心からではない。彼は単にそれを夢に見ただけである。つまり、彼の無意識が特

有の仕方で彼の宗教について所説を述べたまでである³⁷⁾」(拙者傍点) 夢の中段の設定はハギア・ソフィア寺院に似た建物の中である。ハギア・ソフィアは非常に古いキリスト教会であったが、つい最近までマホメット教会として使われ、現在は博物館として使用されており、次々と姿を変える商会に似ている諸説統合的建物である³⁸⁾。「しかし、これは無意識が瀆神的意図 (blasphemous intentions) をいだいているのではない。無意識はただ、現代人の心にはどういふわけか見られなくなったあの失われたディオニソス³⁹⁾を再び宗教的世界に再興 (restore) させようとしているだけである³⁸⁾」(拙者傍点) これは彼の意識が無意識へ分離した本能的部分である猿を再興するには、非常にふさわしい場所が用意されたとみることができる³⁸⁾。だが、彼は無意識の持っているさまざまな傾向に対して不安を感じていたので、教会が与えてくれる宗教にすがってこの不安からのがれようと試みた。そこで、彼の無意識の部分であるアニマが悲しみ、夢の後半の経緯には注意を払わなかった。後半では「夢は彼の精神的状況を正しく叙述している。夢にあるのは世俗性と群集本能によって壊乱された墮落した宗教の姿である³⁷⁾」

② フロムは、この夢には夢見者の二つの大きな要因が存在しているとみる。一つは宗教に対する激しい非難であり、もう一つは精神的独立への真剣な願望である⁴⁰⁾。

まず夢の前半から後半に至るまで教会を非難し馬鹿にし続ける場面がちりばめられている(これに対しユングの場合は瀆神的意図はない)。友人はカトリック教会を理解できないと非難する。教会を兵士の集まりの如く見ている檄文がある。教会は劇場や商会や軍隊の点から描写されている。酒が配られた礼拝式は浮かれ騒いだ集まりに墮落していく。このような夢を見ることによって夢見者は教会をからかい続けているのである。教会が群集を引き付けるためには「アメリカ式」を用いなければならないのだ、と牧師にまでそのようなことを認めさせていることによって夢見者はこの点を強調しているのである³⁷⁾。これは取りも直さず夢見者の意識から出た非難である。

この非難と同時にもう一つ夢見者の精神的独立への願望が夢に表わられてい

る。すなわち、偶像を拒否するマホメットの格言「汝らに善行を施す者に諂うなかれ」は神に諂う教会の習慣に対する夢見者自身の批判である、と同時に、そのようなものからの精神的独立への真剣な願望である。それは母親からの精神的独立へ通じることは先に見てきた。夢の後半で全員が声をそろえて「……天国は自分自身の中にあり」と「非常に厳粛な調子で」三回も繰返し、その経験を離れては「他のものはみな紙にすぎぬ」というのを聞く。これは人間の外から支配される権威からの解放の企てであり、人道主義的宗教への芽ばえである。夢の終わりに宗教の二つの生き方が出てきているのは「ユングが仮定するように、ありふれた妥協に達したのではなくて、夢見者は権威主義的宗教と人道主義的宗教の相違について全く明白な概念に到達しようとしているのである⁴¹⁾。」この夢全体としては、夢見者の意識が権威主義的宗教への非難から始まって、そのような宗教と人道主義的宗教の分化へと進んでいったことを表わしていると解することができる。

2) 「精神統一の家」の夢

動物を人間に変容させる〔夢22〕の後に見たのが下記の夢である。

〔夢16〕私は一風変わったある荘厳な建物を訪れる。この建物は「精神統一の家」と呼ばれている。背景に沢山の蠟燭があって、それが上向きの四つの先端を持つ風変りな形に配列されている。建物の入口の扉の前には年老いた男がひとり立っている。人々が中に入って行く。彼らは一言も喋らず、精神を統一するために身じろぎもせずに立っている。扉のところに立っている例の男がこの家に入って行く人々について、「あの人たちは今度出てきた時には浄められている」という。そこで私自身も建物の中に入るが、完全に心を集中することができる。すると次のように言う声が聞こえる。「お前のしていることは危険である。宗教は、女性の像なしで済ませるためにお前が支払わなければならない税金ではない。なぜなら女性の像はなくて済ませられるようなものではないのだから。宗教を心(soul)の営みのもう一つの側面の代償として利用する者に禍いあれ。そのような者は誤謬を犯しているのであって、呪われるであろう。宗教は代償ではなく、心のもう一つの営為を完全ならしめるものとして、そこ

に最後のものとして加えられるのでなくてはならない。お前は生の充実 (fulness of life) の中からお前の宗教を生み出すべきであり、そうしてはじめてお前は浄福に到るであろう！」特に声を強めて言われたこの最後の一句と同時に遠くから音楽が聞こえてくるが、それはオルガンによる単純な和音の演奏である。この節にはどこかワーグナーの魔火のモチーフを想わせるところがある。建物の外に出ると、燃えている山が眼に入るが、それを見ながら私は「消されることのない火こそ聖なる火だ」(バーナード・ショウ)『聖女ジョーン』と感ずる⁴²⁾。

この夢についても、ユングとフロムの解釈が相違するところを中心に取り上げて比較検討したいと思う。

(1) 「声」の出所と消されることのない「火」の意味

この夢ではユングもフロムも「声」が示す宗教⁴³⁾を重視する点では一致する。しかし、その声が表示する思想は誰のものか、ということに関してはユングとフロムの解釈は明らかに異なる。両者はその相違を意図的に強調しているくらいである⁴⁴⁾⁴⁵⁾。

① ユングの解釈。結論を先に言えば、ユングはこの夢の中の声は無意識の所産であるとみる⁴⁶⁾。ユングは「自分自身の意識的な努力によって産出ないし獲得したものと、明らかに無意識が産出したものとを区別する⁴⁵⁾。」そして、今、この夢見者の意識的な態度が宗教的現象など到底生み出しそうもないところを見ると、意識的洞察を陵駕するような基本的な宗教現象が夢に表われたのは、彼の意識ではなく無意識の表われである声とその宗教現象を生み出したに違いないという⁴⁵⁾。「荘厳な家の夢にでてくるあの声を、夢見者の意識的自我 (conscious self) をその一部分として含んでいるもっと完全な人格 (more complete personality) の所産だと解釈する。この声が夢見者の現状意識に優る知的明快さを示したのもそのためであると考え。声のもつ絶対的権威 (absolute authority) もこの優越性のためである⁴⁶⁾」。

次に、消されることのない「火」とは何かを考えてみたい。まず、無意識の声の立場は「生 (life) の充実の中から宗教 (聖なるもの) を生み出すべきであ

る」と主張している。その後で「消されることのない火こそ聖なる火だ」と感じたのは、夢にあるように夢見者の立場である。今、この両者、すなわち、無意識の立場と意識の立場が符号していると考え、⁴⁷⁾「消されることのない火」は「充実しつづける生」に、「火」は「生 (life)」に解される⁴⁷⁾。そして、それらは共に聖なるものを表わす。今、夢見者の意識は、無意識が提示した「生の充実の中から宗教を生み出すべきである」ということを受け入れて、それを意識の立場から「消されることのない火は聖なる火だ」と表現したと言える。夢見者はこの夢の中で無意識の声が示す生命のもつ宗教性 (ヌミノースム) を認めたと解することができる。

〔夢21〕の猿の再興の夢で、本能的部分の意識秩序内での再建が現実化するには、意識的態度が大きく変化する必要があることが説かれた。その後〔夢22〕で潜在可能性としての人格の再生が行なわれ、大きな意識の変化を予示できる状態が提示された。その後必然起ってくる意識の変化の過程として直面しなければならなかった場面がこの〔夢16〕に表われていると思われる。夢見者は自分の意識的努力の所産ではない、無意識の声に従って生命の宗教性を認めたのである。「猿の再興」に必要とされた「意識的態度の大きな変化」とは、無意識が提示した生命の宗教性を認めることだったと思われる。ユングは「無意識の中には真正な宗教的機能 (authentic religious function) が存在している⁴⁸⁾」ことを示唆している。

② フロムの解釈。その声は無意識の所産であるというユングに対し、フロムはその声は意識の所産であるという。「その声が表現する思想は、その個人自身の思想に他ならない。……中略……われわれが眠りの中で考えるのは、われわれの思考である⁴⁹⁾。」フロムは〔夢19〕の教会の夢と同じ傾向が、この夢にも表われているのであり、夢見者の思考である人道主義的宗教が声によって表現されていると解釈する。

また、消されることのない「火」は「ユングが示すごとくしばしば神の象徴にもなることは事実であるが、それはまたしばしば『愛と性』の象徴にもなるのである⁵⁰⁾」と言い、フロムは後者の立場を取っている。「消されることのない

い火」は夢見者自身の渴望である「愛と性的情熱」を表わしており、「消されることのない火は聖なる火だ」というのは、「愛と性的情熱」と「宗教」とは分離されるべきでないという主張である⁵¹⁾。夢全体の解釈としては「前の教会の夢のようなひょうきんなやり方で教会を非難しているのではなく、夢見者が権威主義的宗教に対比するものとしての人道主義的宗教について、深遠で明確な叙述をするに至ったことを示している⁵⁰⁾」。

3. ユングの宗教観に対するフロムの批判

上に宗教夢に関するユングの解釈に対して、フロムが批判を加えている二つの夢について両者の相違点を見てきた。そこで明らかになってきたことは、夢を意識の所産とみるか無意識の所産とみるかが一番大きな相違であると考えられる。

フロムの場合には意識の所産とみる。〔夢19〕の中心はその格言に接して婦人はなぜ悲しんだかという箇所にあるが、フロムによると、夢見者は権威から解放されて自由になろうとする意識の芽ばえた時期に、その意識状態を格言にたくして表現した。それで母親は悲しんだ。〔夢16〕でも、その声はフロムにとっては意識の所産である。声が示す宗教の内容は、その時期の夢見者の意識を反映したものであり、それは夢見者の思考であると解釈される。

それに対して、ユングの場合には、夢の内容には、夢見者の意識的状況の描写はあり得るが、それは意識的な願望や思考とはかかわりなく、無意識の介入によって夢に表われてきたと解釈している。しかも、夢の解釈上重要と思われる部分においてはその顕在内容もまた無意識の産物である。〔夢19〕の格言と婦人の悲しみについてであるが、ユングはこの婦人は無意識の表われであるアニマと解釈し、アニマの悲しみを前提として、それに付随した形で格言の意味を解明している。しかも、その格言の意味は〔夢19〕の前後に在る「猿の再興の夢」や「動物たちを人間に変容させる夢」などに、連続するような仕方で解明されている。夢見者の意識的洞察を陵駕するとも思われる〔夢16〕の夢が示した宗教内容も、無意識の所産であると解釈する。ユングは次のように述べてい

る。「ヌミノースムは——それがいかなる原因によって生じたにせよ——主体たる人間の体験であるが、しかし、この体験は人間の意志からは独立している。宗教上の教えや一般的同意によれば、とに角、この体験はいつでも個人の外に存在している原因 (cause external to the individual) に帰すべきものとされている⁵²⁾」。

かくて、フロムは〔夢19〕から〔夢16〕へ変化した方向に、彼自身が見出したものは人道主義的宗教へ発展していく自由と独立の体験であり、ユングが見出したものは個人の外から侵入してきて権威主義的宗教を派生させる屈服の体験である、とみるのである。フロムの批判は、ユングの夢解釈に見られる宗教のみにむけられるのではなく、ユングの宗教観全体に対してもむけられている。主な批判は次の通りである。「宗教体験を我々自身の外にある力によって捕えられることと定義したことにより、ユングは無意識の概念を宗教的なものであると解するに至ってしまう。ユングによれば、無意識は個人の心の単なる一部ではありえないのであり、むしろ、我々の統制を越えて心に押し入ってくる力である……中略……我々に与える無意識の影響は、無意識の性質から言って、『基本的な宗教現象である』という結論にユングが到達するのは、宗教と無意識についてのユングの定義からいって必然的な結果である。宗教の教義や夢は両方とも外なる力によって捕えられている我々の表現であるから、それらは両方とも宗教現象であるということになる。言うまでもなく、ユングの思考論理からすれば狂気 (insanity) は顕著な宗教現象であると言わなければならないだろう⁵³⁾。」

上の批判に対して、ユングの立場からは下記の2点を指摘出来る。①宗教体験はいつでも個人の外から個人を捕えるとしても、それは宗教体験の必要条件の一つであって十分条件とはなり得ないと解すべきと思われる。フロムは個人の外に帰すべきものはすべて宗教と解したところから、教義や夢や狂気も宗教現象と解するに至っている。②上に見てきたユングの夢解釈から、無意識の中には宗教を生み出す機能も存在していることが示唆されたが、無意識の機能のすべてが宗教的なものであるということにはならない。〔夢19〕の解釈にもあ

るように、無意識は「夢見者の以前の状況をよみがえらせた場面」や「現時点での夢見者の精神的状況を叙述してる場面」を生み出す機能をも有している。したがって、夢の顕在内容には夢見者の過去や現在の状況も、また無意識の状況も表現されることがある。

さらにフロムはいう。「ユングにとっては、宗教体験はある種の情緒的体験として特徴づけられるが、それは神と呼ばれようと無意識と呼ばれようと高い力への屈服である⁵⁴⁾」。

この「体験」を基に宗教が派生してくることは次の二人の引用から明らかのように、両者の間に相違はないといえる。ユングは「『宗教』とはヌミノースム体験によって変化を遂げた意識がとる独得の態度、ないしは方向だと言って差支えないでしょう⁵⁵⁾」という。フロムは「宗教の分析はその人の宗教体験の底にある、内面的な心理過程を表わすことだけで止まるべきではない。それはさらに進んで、権威主義的なものと人道主義的なものとの、それぞれ異なった性格構造の発展を招来する諸状況を、すなわち異なった種類の宗教体験がそこから派生してくるような諸状況を見出さねばならない⁵⁶⁾。」という。今やフロムは権威主義的宗教を生み出す状況の一つとしてユングの宗教体験を発見したといえる。

ユングが〔夢16〕でヌミノースム体験と呼んでいるものを、フロムは屈服の体験とみているのである。そのことはフロムが「ユングの宗教観は仏教、ユダヤ教、キリスト教とはその精神において根本的に対立している⁵⁷⁾」という例証まで挙げていることから確かめられる。これら三つの宗教は先にフロムが人道主義的宗教の例証としてあげたものである。

4. パーソナリティ構造から見た内と外

上に宗教夢に関するユングとフロムの解釈の相違を比較検討した。またフロムの理論構成からすれば、両者の宗教観は対立せざるを得なかった。しかし、フロムとユングの宗教夢の解釈に共通点がないわけではない。ここでは両者の宗教夢の解釈の共通点を検討していきたい。

〔夢19〕について：ユングの解釈を換言すれば、夢見者がこの夢で教会に逃れようとしたのは、本来あるべき意識と無意識の連結が回復しはじめたことの徴候である、と見ることができる。フロムにとってこの夢は権威主義的宗教への非難が芽ばえてきたことを表わす。したがって、フロムとユングにとって、この夢は各々が主張する人間のあるべき方向に夢見者が進んでいることを表わしており、それに到達する前のプロセスを表現した夢である、とみることができる。

〔夢16〕には、フロムは真の宗教と呼びたい人道主義的宗教の明瞭な概念に夢見者が到達したことをみてとる。他方、ユングによればこの夢の中に無意識によって示された第二の宗教を、夢見者も夢の中で認めたことを表わす夢である。結局、両者にとってこの夢は本来あるべき宗教体験に夢見者が到達したことを表わす夢であると言える。フロムもユングも宗教は人間に固有なものであると主張しているが⁵⁸⁾、その固有なものをこの全く同じ〔夢16〕に、二人が見出しているのである。

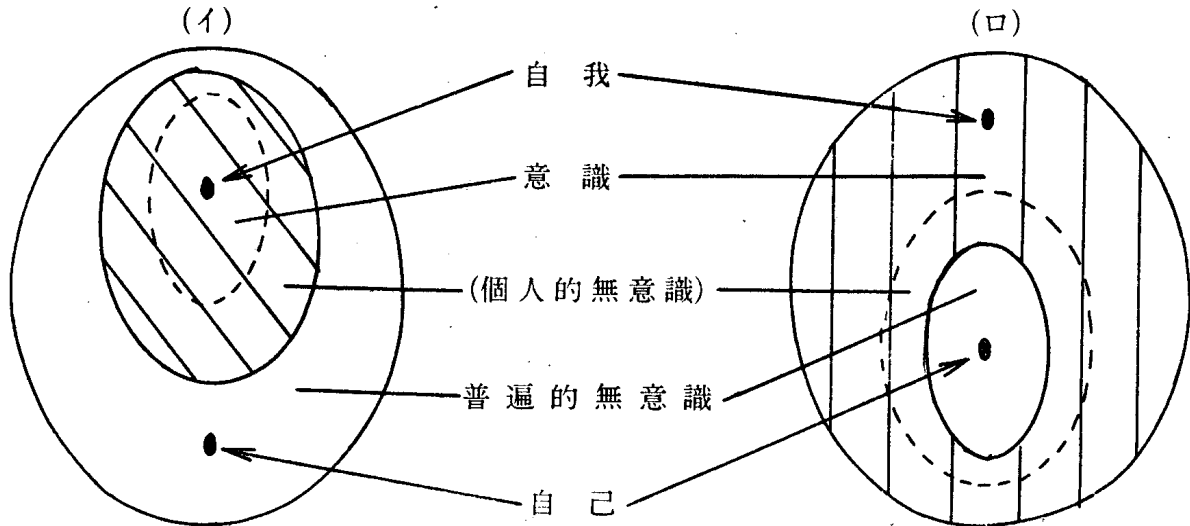
〔夢16〕で見出したものをフロムは人道主義的宗教のカテゴリーに分類した。ユングはヌミノースムの性格のカテゴリーに分類した。しかし、フロムが人道主義的宗教の表現でもって、またユングがヌミノースムの性格という表現でもって、表わそうとしたものは共に宗教性を表現しようとするがための概念である。フロムもユングも〔夢19〕から〔夢16〕への変化の中に見出しているものは人間のあるべき宗教へ向けて人格転換をしつつある人間の姿であるといえる。

上のようにグローバルな見方をすれば、両者の見解は本質的なところでは類似しており、統合しうるのではなからうか。それらは意識と普遍的無意識の両方を包括する人格構造⁵⁹⁾を仮定することにより統合しうると思われる。そのような人格構造の表わし方は種々考えられるが、便宜上、図1(イ)(ロ)で表わしてみた。

フロムとユングが共に「個人の所産、私の意識・声・思考」であると考えられる範囲は図1の斜線の領域である。この領域には、意識から抑圧された諸々の内容が含まれており、個人によってその内容が異なりうる、いわゆる個人的無意

識が属している。ここで個人的無意識と意識の区別はフロムにとってはとり立てて問題になることもなく「意識」として概括されて差支えないと思われる。

図1 人格構造

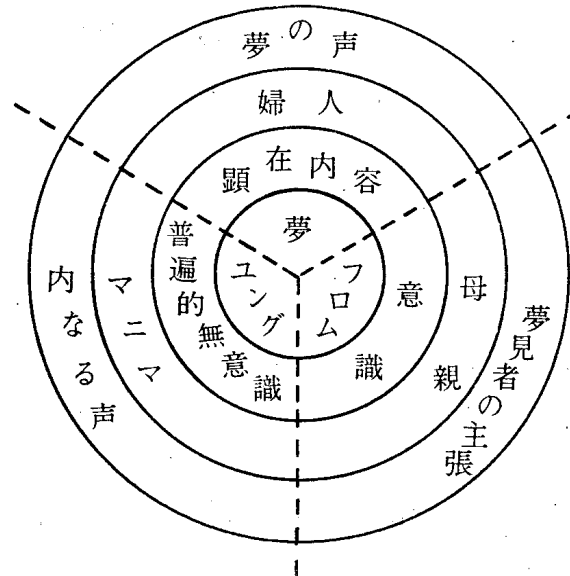


それにユングの仮定する無意識，すなわち普遍的無意識を加える。この領域は個人的無意識や自我をもその中に包含しており，それらから独立した存在であり得る。この領域はすべての民族，すべての個人に——個人的無意識とは無関係に——共通したものを有しており，それ自身の中心である自己 (self)⁶⁰⁾ をもっていると仮定される。今，夢がフロムの意識とユングの普遍的無意識の相互作用から生成されると仮定して，それら三者の対応関係を表わしたのが図2である。

二人の相違点である〔夢19〕の婦人や〔夢16〕の声の意味について，ユングは普遍的無意識のレベルから説明し，フロムはそれらを意識レベルから説明したと解することができる。一方，〔夢19〕から〔夢16〕への変化に対する両者の共通点は人格構造上において意識と普遍的無意識の共有領域が拡大する方向へ変化したことを仮定することによって説明できる。拡大した共有領域は，意識上では，フロムの人道主義的部分にあたり，普遍的無意識上ではヌミノースムの産出に関係した部分である。

フロムがユングの宗教を権威主義的宗教と呼ぶか人道主義的宗教と呼ぶかは，普遍的無意識を人間の外部に見るか内部に見るかの問題でしかないと思わ

図2 意識と普遍的無意識と夢



れる。もし、人間の内部に普遍的無意識の仮定が許されるならば、人間の外なる宗教を権威主義的宗教とよび、人間の内なる宗教⁶¹⁾を人道主義的宗教と呼ぶ、フロムの呼び方からすれば、「人間の内の内なる宗教」をユングは示したことになる。

同一人物が見た同じ夢についてのユングとフロムの解釈の相違点と共通点は、意識と普遍的無意識とを統合した特定的人格構造を仮定することにより、同時に説明できるのではないかと考えられる。

注

1. Jung, C. G. の著書は特に明記しない場合は, Collected Works of Jung, C. G., Princeton University Press, 1977年版による。
2. 本文中, 事例に関する逸話が, 夢の記載されている頁の直前または直後に記載されている場合は, その逸話の出典・頁は省略した。但し, 逸話に関する key word はこの限りでない。

- 1) Fromm, E. Psychoanalysis and Religion, Yale University Press. 1950, p. 21.
- 2) ibid. pp. 25~26.
- 3) ibid. p. 27.
- 4) ibid. p. 26.
- 5) ibid. p. 65.
- 6) ibid. pp. 79~94.

- 7) ここでフロムが述べている能力はフロイトの精神分析が明らかにした近親相姦に含まれる精神構造の克服と密な関係がある。
- 8) 新約聖書 マタイによる福音書22章39節
- 9) Fromm, E. op. cit. p. 34.
- 10) ibid. 51~52.
- 11) ibid. 35.
- 12) ibid. 37.
- 13) ibid. 52.
- 14) ibid. 75~6.
- 15) ibid. 35~49.
- 16) この事例については小論(Ⅱ)でも触れているが、ユングがその夢について比較的まとめて考察しているのは次の書である。
 - ① Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, Part II, 1936, pp. 39~224.
 - ② Jung, C. G. Psychology and Religion, C. W. 11, 1938/1940 pp. 5~33.
- 17) Jung, C. G. 1944 (池田紘一他訳, 心理学と錬金術Ⅰ 人文書院 1976 pp. 187~189)
- 18) Fromm に限らず Freudian の大多数についても当てはまるものと思われる。
- 19) Jung, C. G. Psychology and Religion, C. W. 11, p. 24.
- 20) ① ibid. p. 34. ② 小論(Ⅱ) p. 81.
- 21) Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 89.
- 22) anima
 - ① 小論(Ⅰ)(Ⅱ)
 - ② Jung, C. G. Psychological Types, C. W. 6, pp. 221~3, 463~472.
 - ③ Jung, C. G. The Relations between the Ego and the Unconscious, C. W. 7, pp. 188~211.
 - ④ Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 150. 他
- 23) illuminatio/illumination.
 - ① 小論(Ⅱ)で Paracelsus が natural light と呼んだものを指すと考えられる。
 - ② Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 10, 57, 63, 91, 148 他
- 24) Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 91.
- 25) ibid. 124.
- 26) Kalff, D. M. (河合隼雄監修, カルフ箱庭療法, 誠信書房, 1972, p. 53. 103. 他)
- 27) Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 129.
- 28) Jung, C. G. Psychology and Religion, C. W. 11, p. 34.
- 29) Jung, C. G. Psychology and Alchemy, C. W. 12, p. 143.

- 30) *ibid.* 148.
- 31) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 31.
- 32) Jung, C. G. *Psychological Types*, C. W. 6, pp. 450~451.
- 33) Fromm, E. *The Forgotten Language*, Rinehart and Company Inc. 1951, pp. 103~110.
- 34) 小論(Ⅱ) 2. フロイトの宗教観
- 35) Fromm, E. *The Forgotten Language*, Rinehart and Company Inc. 1951, pp. 104~105.
- 36) Freudian に対比するものとして Jungian という語が用いられる。
- 37) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 32.
- 38) Jung, C. G. *Psychology and Alchemy* C. W. 12, pp. 142~3.
- 39) ① *ibid.* pp. 89~91, p. 131. ② Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 28.
- 40) Fromm, E. *The Forgotten Language* Rinehart and Company Inc. 1951, pp. 103~104.
- 41) *ibid.* p. 105.
- 42) この夢は小論(Ⅱ)で取り扱ったものである。
- 43) 小論(Ⅱ)の第二の宗教
- 44) Fromm, E. *The Forgotten Language*, Rinehart and Company Inc. 1951, p. 96.
- 45) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 39.
- 46) *ibid.* p. 41.
- 47) *ibid.* pp. 36~37. 小論ではこのような説明の仕方を試みたが, Jung は「火」は「神の属性」として旧約聖書等に登場することから「火」は「生命」を表わすと解釈している。
- 48) Jung, C. G. *Psychology and Religion* C. W. 11, p. 5.
- 49) Fromm, E. *The Forgotten Language*, Rinehart and Company Inc. 1951, pp. 96~7.
- 50) *ibid.* p. 107.
- 51) *ibid.* p. 108.
- 52) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 7.
- 53) Fromm, E. *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press, 1950, pp. 17~18.
- 54) *ibid.* p. 19.
- 55) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 8.

- 56) Fromm, E. *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press. 1950, pp. 51~52.
- 57) *ibid.* p. 16, p. 19.
- 58) 小論(Ⅱ) p. 76.
- 59) Jung, C. G. *The Structure of the Psyche*, C. W. 8. p. 151.
- 60) Jung, C. G. *Psychology and Religion*, C. W. 11, p. 82.
- 61) Fromm, E. *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press. 1950, p. 48
で、フロムは次のように述べている。Jesus' precept that "the kingdom of God is within you" is the simple and clear expression of nonauthoritarian thinking.